

英国と日本の狭間^{はざま}で (00・12・18)

大川 美雄 (昭17・9 文丙)

イギリスに生まれる

未だに本当に日本人になりきっているかどうか、本人にもよく分からない大川美雄です。僕がイギリスで生まれたのは何も自分で選んだわけではないのですけれども、あの国は出生地主義ですから、あそこで生まれると、自動的にイギリス人の国籍を取得することになっています。たまたま古い書類のなから僕の出生届の写しが出てきました。もちろんイギリスの役所に出したものです。一九二三年に父親がパディングトンというロンドンの一区域を管轄する役所へ届けているのです。生まれたのは3 December 1922、生まれた場所が当時の両親の住所、名前はYoshio、性別はboy、父の名前はKiichi Okawa、母の名前はMitsuko、届け出たのは1923 January 9とあります。当時の国王ジョージ5世の横顔のある収入印紙が貼ってあります。

では、なぜ僕がイギリスで生まれたか。父は大阪高商、そこにおられる中江君のお父様と同じ学校で、中江君のお父様が先輩だったのです。そこで英語の勉強に興味を持ち始め、一生懸命イギリス人について英語を教わっていた、という話を本人から聞きました。大阪高商を卒業して、自分で発心して、一人でイギリスへ渡ったのが、どうやら第一次世界大戦の始まる直前、一九一二・三年頃ではないかと思ひます。

イギリスで勉強を続けている途中で、たまたま大阪の山中商会という古美術商のロンドン支店に拾われて、そこで働くことになるわけです。いつ頃山中商会に拾われたのか知りませんが、少なくとも、一九三二年に日本に戻ってくるまで、二〇年近くロンドンにいたことになります。父は一九二〇年（大正九年）か二十一年（同一〇年）に、日本に帰ってきて大阪で母とお見合いをして結婚、まだ一九才位ではなかったかと思うのですけれども、母を連れてまた海路ロンドンへ戻って行きました。その翌年の一九二二年（大正十一年）一二月三日に僕が生まれたのです。そして出生地主義をとる英国で生まれたから英国人になってしまった。ただ両親は日本人ですから、血統主義により日本人でもあるわけで、二重国籍だったわけです。

母は一九か二〇で、もちろん外国に出たことも初めてですし、英語も全くできない。それで、恐らく父親が心配して、母親がイギリスの生活に慣れるまでの間、英語も教え、買

い物などの家事も手伝つて、一人前の主婦になるように助けてもらうために、母親の手伝いとしてイギリス人の女性を頼んだらしい。実は、その人が僕にとっては忘れがたい、いわばほとんど育ての親と言つてもいい人でした。

その人の名前はベティ・パウシャー、ベティですから本名はエリザベス、ミス・エリザベス・パウシャーです。そして父親が決めたのか、母親が決めたのか知らないのですけれども、便宜上彼女に日本名も付けた。当時みんなが読んでいた徳富蘆花の「不如帰^{ほととぎす}」という小説の女主人公の浪子^{なみこ}という名前を、その女性に付けたのです。もちろん僕の母よりも幾つか年上だったと思いますけれども、このなみこ、これが本当に僕が日本へ連れて来られるまで育ててくれた人だった。

母親にだっこしてもらつたりおんぶしてもらつたりして、部屋の中を歩き回つたり連れ回されたことは覚えていますけれども、それ以外の幼少の頃の思い出は全部、このなみこという人との思い出です。ですから僕の英語は彼女仕込みですし、行儀作法等もすべてこの人が仕込んでくれました。

さて、日本にいよいよ連れて来られるとき、テムズ川下流のテイルブリー・ドックス（テイルブリー埠頭）で、日本郵船の靖国丸という船に乗つて、いよいよロンドンを去る時、彼女と別れるのが一番つらかったことを覚えています。人生における悲しみを覚えた

最初の経験が、このなみことの訣別のときです。それからずっと手紙をやりとりしていましたが、それでも、一九四一年（昭和一六年）に太平洋戦争が起こつて敵国同士になり、通信が途絶えてしまいました。

戦後一九六一年（昭和三六年）、ロンドンの波止場で別れてから四〇年近く経って、私は外務省の職員としてロンドンに赴任したとき、是非なみこに再会したい、家内にも引会わせたいし、子供達も会わせたいと思つて、家族を車に乗せて、南の方のデボンシャー州のプールという町に住んでいる彼女に会いに行きました。

その再会がまた実に劇的なシーンでした。自分がかつて何十年も前にかわいがつて育ててやった日本人の少年が外交官になってイギリスへ歸つて来て、自分を訪ねてくれたという事で感激したのでしょうか、とにかく二階から下りて来ないのです。お姉さんとお兄さんと兄妹三人で住んでいましたが、なかなか下りて来ないから、お姉さまが上へ迎えに行かれた。そして階段の途中で座り込んで、泣きじゃくつてしまつています。僕が階段の真ん中くらいまで上がつて行つて、抱きかかえるようにして連れて下りたという記憶があります。約四〇年ぶりの忘れがたい再会でした。もうとつくに亡くなりましたけれども、要するにこの人が僕を育ててくれた母親代わりだったわけです。この人が僕の人間というか、人生に非常に大きな影響を与えてくれたことは間違いないありません。

帰国子女でなく、来日子女

生まれてから七つ位になるまでは、ロンドンのど真ん中のメイダーヴェールという地区のアパートに住んでいたのですけれども、そのうちに、またもう一人子供が生まれるので郊外に引っ越した方がいいということで、ヴィクトリア・ステーションから電車で三〇分くらい南の方に行ったパーリ(Purley)というところへ引っ越したのです。

そこで僕は初めて学校に行きました。行かされた学校は、家からちよつと右に行つて道を渡つた、ほとんど真向かいにありました。女学校の付属小学校でしたが、その小学校は一〇才ぐらいまでの男の子も入れてくれるということで、そこに入れられた。それが最初の学校で、その頃のノートブックとか、成績表まで全部手許に残っています。

この間久しぶりにちよつとイギリスへ行つたとき、その家を見に行つたら、その町が驚く程変わっていて、家も学校も跡形もありませんでした。けれども、住んでいたうちの直ぐ横にあったピアノの先生が住んでいたうちはまだそのまま残っていて、その前で写真をとってまいりました。

当時の英国は、僕の生まれた頃から、第一次世界大戦でドイツに勝つて意気軒昂でした。まだ、大英帝国華やかな時期で、文乙や理乙の方には申し訳ないのですけれども、ドイツ

という国はけしからん国だから負かしてやったという氣風が友達の間でもみなぎっていた。ドイツは、二度とああいふうに、軍隊を持って暴れ回ってもらったら困るというような雰囲気だった。だから、友達と遊んでいるときでも、ドイツについてはそんな気持ちをみんな持っているものですから、そんな気持ちが僕にもいつまでも残りました。日本へ連れて来られて小学校に行き、中学校、高等学校、大学に行っても、ずっとドイツに対するそういう子供心が残ってしまった。ほんとうに恐ろしいものです。

話は元に戻りますが、とにかく一九三二年（昭和七年）の六月の中頃ぐらいに、ロンドン塔からテムズ川を少し下流へ行ったテイルブリー・ドックスから、靖国丸に乗ってロンドンを出発しました。そのときになみこが船の上まで上がって来て、そして最後にキャビンの中で、僕をベッドに入れてちゃんと毛布が体に沿っているか確かめてくれて、お休みをして最後にキスをしてくれました。それがお別れでした。それが一九三二年（昭和七年）六月の中頃で、当時は遙か日本まで来るのに、飛行機はもちろんありませんし、船しかない。その船の航海は六週間から七週間かかりました。

地中海に入って最初に寄港したのが南仏のマルセーユ、ちよつと上陸したのをかすかに覚えています。次にローマの直ぐ近くのナポリに寄港してポンペイの遺跡を見学し、それからエジプトの北の端にあるポートサイドという港町からスエズ運河に入って、運河の南

端のスエズという町に寄港し、次いで紅海を南下してインド洋に出るわけです。

これで思い出すことは、父と母がポートサイドで下りて、何かバスか駱駝か知らないけれど、とにかくエジプトを陸路旅行して、スエズでまた乗って来た、僕は船に残されたままだったのです。連れて行ってもらえなかったことが、いまだに残念です。

紅海を通じてセイロン（現在のスリランカ）のコロンボに寄港、ここは両親と一緒に上陸しました。それから又インド洋を通して、シンガポールまで行くのですけれども、インドの東側のインド洋で、モンsoonというものすごい暴風雨に遭いました。吹いて吹いて船が揺れて船酔いになり、母親に「Stop the boat!」（船を止めてくれ）と叫んだことを覚えています。それほどひどい船酔いで参ってしまった。

それからシンガポール、香港に寄港したが上陸はせず、一路関門海峡を通って神戸に入港したのです。そこで初めて日本の土を踏むことになるのですが、それは一九三二年七月二〇日過ぎだったと思います。

よく他人から、あなたは帰国子女の第一号ですねと言われます。僕は「違う、帰国子女ではない」と言うのです。帰国というのは、国内にいた者が外国へ出て、そこから戻って来ることなんだ。僕は戻って来たのではなくて、よその国から連れて来られたのだ。だから「来日子女だ、帰国子女ではない」といつも言うのです。帰って来たという気持ちはも

ちろん、全くありませんでした。拉致ではないけれど、意に反して親に連れられて、日本という遠い遠い変なところに連れて来られたと、そういう気持ちだったのです。

神戸の港に着いたら、母や父の兄弟や子供達が大勢出迎えに来ていました。もちろん、私と話は通じません。その前に話しをしておかなければいけないのですけれど、イギリスにいるときは、どういうわけか、父と母は自分たちの間では日本語でしゃべっていましたが、僕に對してはいつも英語でしゃべりました。考えてみたら、恐らくなみこがいつもいるものですから、彼女に對する心遣いからか、僕に對しては、彼女にも分かるような言葉でしゃべっていたのではないかと思います。もう一つは父親の配慮というか、この子が将来イギリス語を忘れないためにも、今からしっかりイギリス語、英語の基礎をしこむために、英語でしゃべってやった方がいい、日本語は後回しでもいいということだったのではないかと思います。両親に直接聞いたことはありませんけれども、そういうふうに自分では解釈しています。

だから当時、さっきのパーリという町に住んで学校に通っていた頃、知っていた日本語で今覚えてるのは二つだけ、一つは「羊羹」^{ヨウカン}、もう一つは「おかき」（おせんべい）です。それで学校では、毎朝一〇時頃になるとお十時の時間があるのです。生徒は皆、家で紙袋に入れてもらったビスケットとか、ちよつとしたお菓子を持ってきて、学校で出してく

れるミルクを飲みながら食べました。そして、僕はときどき紙袋におかきを入れてもらって学校へ持っていくわけです。そうするとクラスの友達の男の子や女の子達が珍しがって、僕の周りに集まってきた、ほとんどみんな食べてしまうのです。だから自分ではお十時に持っていたおかきが、殆ど自分の口に入らなかったということがよくありました。

まあそういうことで当時覚えていた日本語は羊羹、おかき、それだけだったです。それからうちでは一週間に一度くらい日本食を食べていました。ところがライスというのは、あのままでは食べられないのです。ジャパニーズ ソースをぶっかけて食べるわけです。ジャパニーズ ソースというのは醤油のことです。だからご飯をこのまま食べるのは、今でも余り好きではないのです。なにかぶっかける、みそ汁をぶっかけるとか福神漬をにかけて食べるのが、いまだに悪いくせとして残っているぐらい、考えてみたら変な子だったのです。

そのほか、子供時代のことはいっぱいありますけれどそれは省きまして、神戸港に着いてからのことを続けます。言葉が全く通じない叔父さんや叔母さん達、そして従兄弟達と始めて会ったわけで、どうしたらいいのか全く分からない。それに、日本に家があるわけではないから、これから家捜しということで、それまでの間、宝塚ホテルに連れて行かれて、そこで二・三ヶ月過ごしました。宝塚ホテルが、現在も阪急電車の宝塚南口のところ

にあります。神戸港から車でそこに直行しました。両親は父の兄弟と一緒に別の車に乗っていて、僕は母の二人の兄弟と一緒に乗った。僕は運転手さんの横に座って、二人の叔父さんは後ろに乗っていたのです。そして叔父さん達が後ろから一生懸命何か訳の分からない英語で僕に話しかけてくるけれど通じない。僕が英語で話しかけてもそれとも通じない。だから妙な雰囲気の中で神戸港から宝塚まで行ったことをよく覚えています。

日本の小学校

二・三ヶ月して、父が芦屋に借家を見付けて、そこへ移ったのが夏の終わり頃だったでしょう。たまたま学校の二期が始まる頃です。公立の学校に入れられたら、全く言葉ができない子供ですから大変だろうということで、特別の小学校に入れてくれたのです。黒柳徹子さんが書かかれた「ととちゃん学校」という本がありますけれど、まさにそのととちゃん学校で、「芦屋児童の村小学校」という私立の学校です。そこは一年生から六年生まで、全校生徒で五十人いないのです。体の弱い子供、あるいはおつむの弱い子供、身体に障害のある子供、それから僕みたいに外国から帰ってきて言葉ができない子供、そういう特殊児童ばかりです。本当は年齢からすれば四年生に入るべきところ、三年生に入られました。昭和七年九月、三年生の二期に入って、四年後の昭和十一年三月にそこ

を卒業できたのです。

そこに入学してから少しずつ日本語を覚えるようになりました。毎週土曜日に、神戸のカナデアン・アカデミーという学校から、カナダ人の婦人が、同級生の子供達に英語の会話を教えるにきていました。僕はそれに出席する必要がないものですから、僕の担任の白尾先生という忘れもしない恩師ですけれども、その先生が同級生が英語の勉強をしているときに、僕を連れて村へ散歩に出かけるのです。当時は芦屋市ではなくて、兵庫県武庫郡精道村^{どう}でした。精道村の市場に行き、お店を歩き回って、美雄君これがじゃがいも、これがきゅうり、これがリングゴというふうに、一つ一つ品物の名前を教えてくれたのです。それで少しずつ名詞を覚え、名詞とほかの言葉をつなぐ動詞とかいろんな言葉を徐々に教わっていきました。ですけれど長い長い課程でした。

その芦屋児童の村小学校は非常に小さい学校ですから、みんながみんなを知っているわけで、上級生であろうと、下級生であろうと、お互いに親しくしていましたから、そういう人たちとの連絡がいまだに続いています。同級生や先輩、後輩の同窓会が今日まで続いていて、最近は僕が幹事をやらされています。ついこの間も、十人くらい、殆どの人が七十・八十以上の人達ですが、広尾の日本小料理屋で集まりました。

日本に帰っていろいろ困ったこと、びっくりしたこと、閉口したことがいっぱいありま

した。なんといつても言葉ですけれども、言葉の次は食べ物です。子供時代から十年間近く、毎日毎日食べていたイギリスの食べものが欲しいわけです。そういうものが全く買えない訳ではないのですが、日本で生活するのに、そういうものばかり買うのは大変です。徐々に日本食になるわけですけれども、例えば生もののお刺身は何だか不気味で口が付けられなかった。味噌汁は好きでしたし、すき焼きも好きだった。それから朝はパン食で、バターとかジャムとかマーマレードとか、そんなものを買って食べていましたが、食事は後々まで苦労しました。いまだに日本食よりもヨーロッパ系の食事の方が、どっちかというと好きです。そういう子供時代の習慣が、いつまでも残っているのは仕様がないうことです。すが、やっぱり困ったことです。

それから靴で生活して来たわけですから、家に上がるのに靴を脱がなくてはいけないということは、これは面倒だし、第一はだしになるのはいやでした。たとえ、畳の上でも、靴下をはいていても、靴を脱いで家の中に上がるのはいやでした。靴を脱ぐという日本の習慣がまだ分らないうちに、どっかのうちへ連れて行かれたとき、靴を履いたままにだだだど畳の部屋へ入って行って叱られたことを覚えています。

それからもう一つ困ったのは手洗い、お便所です。当時はもちろん水洗便所なんてありません。大きな穴があって、その下がまるまる見えるわけです。その上でお通じをし

なければいけないのは本当に怖かったです。普通の家なら一階にお手洗いがあるのですが、大阪のある叔母のうちは二階にもお便所があつて、大便もすべてはるか一階まで落ちるわけです。僕は二階に泊められたので、二階の手洗いで用を足さねばならず、そのとき見下ろして本当に怖かつたことを覚えています。

それから、始めて芦屋児童の村小学校へ行つたときは、運動会の真つ最中で、みんな走り回っていました。そのなかにいた、後に非常に親しくなつた僕より二年くらい年下の少年が僕のところへ走つて来まして、僕のことを「半鐘泥棒、半鐘泥棒」と叫ぶのです。広辞苑で「半鐘泥棒」を見ますと、「(火見櫓の半鐘を盗む者の意)背の高い人をあざけて言う語」とあります。しかし、そのときは泥棒という言葉すら知らないわけです。まして半鐘なんて何だろうという状態です。何を言われているのかわからなくて非常にしゃくに障つたことを覚えています。その半鐘泥棒と言つてばかりの周りを踊り回り、飛び回つた少年は、今青山の骨董通りで有名な古伊万里のお店「たさぶろう」をやつてゐる森茂一さんです。この間も彼にそのことを言つたら、「決して悪気はなかつた、畏敬の念で言つたのだ。」と言つていました。

それから漢字を覚えるのも大変でした。第一カタカナすら知らないわけです。カタカナの方は覚えやすかつたけれど、ひらがなは、ずいぶんぐにやぐにやした字で覚え難くて苦

劳しました。それに比べて漢字の方がむしろ面白いのです。子供の時によく切手の蒐集をします。その切手の蒐集をするような気持ちで、漢字の蒐集を始めたわけです。画用紙に縦と横にたくさん線を引いて方眼を作り、一番上の行のそれぞれの枠に、にんべんとか、さんずいとか、しんにゅうとか、くさかんむりといった部首を並べて書きます。そして新しい漢字を一つ覚えると、該当する部首の下枠内にそれを書き込みます。にんべんは沢山ありますから、にんべんの漢字がだんだん増えて下まで延びてくるわけです。そういうふうにして、郵便切手を蒐集するような遊び感覚で、漢字を蒐集して覚えて行きました。

もう一つは駅名を覚えることに興味を持ちました。阪急電車で芦屋から神戸に連れて行かれたり、大阪に出かけたりするとき、電車が駅で停車すると漢字で書かれた駅名が目に入ります。それを見て一生懸命新しい漢字を覚えめました。ところが、当時はまだ簡略した漢字が殆ど使われておらず、例えば宝塚の宝という字は難しい「寶」が書かれていました。それを一生懸命何回も練習してやっと書けるようになりましたが、寶と言う字は難しいなと思いました。芦屋の芦も、当時は難しい「蘆」を書いたのではなかったかと思います。そういうふうにして、皆様にはとても分かって頂けないような苦勞をして漢字を覚えめました。

小学校のときだか、中学に入ってからだかよく覚えていないのですが、漢字の書取テス

トがありまして、出題のなかに「オンガク」という言葉がありました。僕は音がくの「がく」は、医学とか文学と同じように「音の学」だと考えて、学問の「学」を書きました。そしたらばつをもらったので、え！ と思ってびっくりしたのです。音楽だけは、学問の「学」ではなくて楽しむの「楽」という字を書くのだと知って、びっくりしました。

このことがヒントになりまして、「語学」という言葉について考えました。日本語で語学は語の学と書きます。外国の言葉を学問として勉強しようとする、やれ綴りだ、文法だ、発音だと、非常に難しく考えてしまいます。けれども、語学の学を学問の学ではなくて、音楽の楽を書くことにしますと気が楽になります。ちようどタイプライターを覚えた、自転車に乗ったり、運動をしたり、この頃ではコンピュータを習得するようにです。語学だと手軽に習得できる、という気持ちで外国語を勉強したら楽になるよと、最近学生に教える機会がありましたときに話しました。どうも語学の学という字は間違っている、楽しむという字を書くべきだということを今も信じています。ちよつと話が横道にそれましたけれども。

それから、小学校のとき、年末だったかに学芸会がありました。出し物の一つが「桜井の別れ」の劇で、言葉も歴史も何にも分からない僕が、楠木正成まさしげの役をさせられたのです。相手の正行まさつらは、前に半鐘泥棒といって僕をからかったあの男の子です。ボール紙で作った

甲冑のようなものを着た僕の前に彼が来て、最敬礼して何かペラペラとしゃべると、僕が何か言う。一言二言言ったように思います。けれども、楠木正成とはどんな人物で何をしたのか、この場面はいつたい何なのか、全然知らないのです。そういう不可解な芝居に、いわば主演させられたということが、一つの苦い思い出になっています。

それからピアノができたものですから、みんなで歌を合唱するときにピアノの伴奏をさせられました。お辞儀のときには、バーン、バーン、バーン、というピアノ伴奏の弾き方があるのですが、まだそれを知らないときのことです。音楽の先生がみんなの前でお辞儀をなさいと言いました。僕は分からないから、立ち上がってお辞儀をしたのです。そして、皆がクスクス笑った。先生がそうではないのだと、お辞儀のときの伴奏の弾き方を教えて下さった。これも忘れがたい思い出です。

中学に入る

だんだん日本のことが分かって来たその頃、中学の入試を受けることになりました。近くに甲南中学というのがあって、甲南に入るとあとは高等学校まで無試験で進学できるというので、そこを受けさせられたのです。したら、見事にすべりました。ところが合否の発表があった朝、二・二六事件が起きました。大人達が二・二六事件で大変だ、大変

だと騒いでいて、僕が中学校の入試に落ちたことに余り注目しなかった。それでほっとした記憶があります。そのときの日記がここにあります。私は三高を卒業するまでずっと日記は英語で書いていました。日本語では書けないのです。一九三六年（昭和十一年）二月二十六日 Wednesday, snow, cold, history test といういろいろ書いてあつて 5 o'clock am. many people were killed in Tokyo, including 岡田首相 渡辺教育総監 斎藤内大臣 鈴木侍従長 高橋蔵相 牧野伯爵、えらい人達の名前が難しいからか、漢字で書いてあります。今から考えると不思議なのですけれども、その頃から日本語がろくろくできないのに、そういうことに僕は興味を持っていました。

その二日後の二月二十八日に、例のなみこから手紙が来ました。ジョージ五世陛下のお葬式のことを書いた新聞記事をなみこが送って来てくれたのです。その頃、僕は東京で何事が起ころうと、裕仁天皇がどういう人であろうと知ったことではない、ジョージ五世陛下の方が僕の頭には大事だったのです。キング ジョージ 五世が亡くなったというのが僕にとってはビッグ・ニュースでした。そのジョージ五世陛下は、今のエリザベス女王のお祖父さんに当たる人です。

まあそんないろんなこと、それから、New prime minister, Mr Hirota と書いてあります。数日後、広田弘毅さんが総理になったということを、これは英語で書いてある。松平

大使が宮内大臣と書いてあります。それからどういふ人が閣僚になったかということが、漢字で時々書いてあります。この頃、ある程度漢字が習得できていたのでしょう。

それから翌月か翌々月、中学に何とか入れたわけです。灘中学と甲陽中学とを受けて灘中学にどうにか入った。当時の灘中学は、今の有名な灘高校ではなくて、神戸一中とか神戸二中をすべった人達が、すべり止めに受ける学校でした。

灘中に入る前に非常に悲しいことが起こりました。中学に入るには丸坊主にならなきゃいけない。床屋さんに行つて、きれいに丸坊主にされたことが悲しくて、丸坊主にされて恥ずかしいのと寒いのとで参つたことを思い出します。小学校はまだよかったけれど、中学校では軍事教練がありますし、丸坊主でなければいけないのです。だからそれもいいやなことの一つだったです。

それから、当時の中国では、北京ではなくて北平ペイピンと言つたのですが、その北平へ父親が古美術商の山中商会の北平支店長になって単身赴任しました。そこで、中学校の三年から四年にかけての春休みに、神戸から一人で近海郵船という会社の小さな船に乗って父親を訪ねて行きました。それも船底の三等船客として、玄界灘でひどい揺れでごろごろごろ、あちちからこちちから転がって行くような船旅でした。北平に行くのには、塘沽タンクという港で下船し、そこから四時間くらい汽車で揺られて行かなければいけない。ところが港

の方に父親は迎えに来てくれていなかった。だから一人で汽車の駅まで歩いて行って、一人で切符を買って、一人で汽車に乗った。やっと北平へ着いて、プラットホームに出てみると、そこに父親が迎えに来てくれていた。一人旅の緊張から解放されてほっとしたこと覚えています。そして、三週間くらい父のところで過ごしました。これが僕が生まれて初めて、全く単身でした外国旅行で、十六才で最初の経験によくも挑戦したと思います。それでその北平でお小遣いで買った観光地図がぼろぼろになって今も残っています。最近ある中国人にそれを見せたら、これは骨董品だと言われました。その地図に前門ちえんめんという停車場があります。そのあたりが今日の天安門広場です。当時は前門の駅の前に競馬場があつたのをかすかに覚えています。それが昭和十四年、三高に入る前の年でした。

当時の北平はまわり四方に高い城壁がありました。今から七・八年前に北京に行きましたら、その城壁が全然ないのです。中華人民共和国になって北京となり、町の様子もすっかり変わったようです。それにはびっくりしました。

半イギリス人の三高生活

次は三高受験ですが、まだ日本語が不完全で、しかも四修ですから、よくも三高を受験して通ったと思います。そのときのことがこの日記にちょっと書いてあります。一九四〇

年（昭和十五年）三月一六日、*"at last the first day came"*、これは試験の最初の日で非常に寒かった。最初の試験が国漢、*the question in 漢文 too hard, puzzle was in grammar. 漢文文法なんてあったのでしょうか、国文法でしょうか、とにかくその試験で大分苦勞したらしい。*それから翌日が *English*、*paper is too early* に書き終えたと書いてある。最後の一日が *fatal day, mathematics*、要するに数学はもう一番不得手だった。数学で非常に困っていることがいろいろ書いてあります。それからまだもう一日ある。午前は *physics* で午後は *history*、こうして筆記試験が終わりました。

どんな点を取ったのか全く知りませんが、とにかく数日後に、一次合格の電報を京都から受け取りました。次の口頭試験は三月三十一日、確か二つの部屋に順番に行かされたような記憶があります。ここにも書いてありますが、最初の部屋には伊吹先生と石橋先生と誰かもう一人先生がおられました。僕は文丙志望ですから、口頭試験に伊吹先生がおられたことはプラスだったのではないかと思います。次の部屋では、今から考えると、折竹先生が一番右の端におられたような気がします。ですから文丙志望で、口頭試験の先生が伊吹先生と折竹先生だったことが、多少有利に働いたのかな思っています。そのときに最初に聞かれたことは、何故文丙を受けるのか、将来何になる心算か。外交官になりたいという話をしたのでしょう。外交官として誰が立派だったと思うか、とか、それか

ら趣味とか、好きな作曲家は誰か、というような質問が日本語で行われた。そんなことが日記に英語で書いてあります。

それから身体検査、これは漢字で書いてある。殆どすべての部屋でひっきりませんでした。検尿室、つまり尿検査の部屋で引っかかり、内科でもひっきりなかった。京大病院へ×××をとりに行けと言われたというようなことが書いてあります。とにかくどうにかこうにか入学できました。

それでいよいよ三高生活が始まったら、最初の日に主任教授の伊吹先生が、四〇人の中から大川君、大園君、文一丙総代に指名する、とこう言われたのです。総代って何だか分らない。級長ですよ、要するに。大園と大川で級長をやれというわけ。これはえらいことになった、いったいどうなるのかと思って、本当にその一年間、たったの一年間ですけれども、悩みに悩み抜いているのです。神経衰弱のようになりました。それが日記の方にも書いてあります。

総代というのは、紅萌ゆるの旗振りは大園がやった、私は「紅萌ゆる一発」と叫ばなければいけない、そして歌わなければいけないのです。「紅萌ゆる一発」の「発」って何だということ。そういうことすら分からない。紅萌ゆるを覚えるのにどんなに苦労したか。「紅萌ゆる」はいい歌なのでしょうけれども、例えば、「銀漢」って何だろう、という

わけです。あるいは「ゴビの原」、ゴビの砂漠らしいけれども、砂漠がどうして野原になるのか、それから「ラインの城」とか「アルペンの」とか、ドイツのことばかり書いてあるでしょう。何故「三年の秋の初紅葉」の方が「三年の春の花嵐」よりも先に来るのか、これは不思議でした。昔は学年が秋に始まったということを知らなかったのです。

それから「二千年」と言ったり、「二千載」と言ったり、「二千載」ってどうしてそんな難しい言葉を使わなければいけないのか、二千年なら二千年でいいではないか。「檠燈かけ」の檠燈って難しい字を書くのだな、何だろうというふうに、一々苦労するわけです。ただ、「紅萌ゆる」はしょっちゅう歌うからいつの間にか覚ええました。けれども、「行春哀歌」とか「紀年祭歌」とか、そういう寮歌には本当に閉口しました。日本語の意味が分からない、だから覚えられないのです。

寮歌だけではないのですが、小学校の頃から感じていたことは、日本の、例えば童謡にしても、みんな短調が多い。「七つの子」とか、「赤い靴」とか、「砂山」とかはみんな短調です。僕は子供の頃から長調の歌に慣れていましたから、「雨降りお月さん」は好きだった。だけど「赤い靴」はさみしい、悲しい歌だなと思った。それから軍歌にしても、大志気を鼓舞するため、元氣付けのために歌う歌なのに、殆どが短調だということに気が付いた。「ここはお国の何百里」とか、「水師營の会見」とか、みんな短調です。ただ一つ

あの頃できた「愛国行進曲」は長調でした。これは気持ちのいい歌。内容はあまりいい歌ではないけれども、とにかく長調で、志気を鼓舞するにはいいなと思ったことを覚えていきます。

ところが、三高の歌の殆どが短調です。しかも、難しい字がいっぱい出てくるものですから覚えられないのです。だから僕は三高の歌では「琵琶湖周航歌」だけが好きだった。これは長調だから気性に合うし、歌詞も割合覚えやすかった。

とにかく総代ということで苦労していたその年の途中で、第二次近衛内閣成立し、いわゆる「新体制」が発足した。四〇年（昭和十五年）九月でした。これは明治維新よりもすごい変革なのだということを、先生が全員で最初の半時間を使って説明することを政府が命じた。僕のクラスは、折竹先生が説明された。

それで、僕が所属していた音楽部が、新体制のお陰でつぶされそうだということを心配しています。それから、総代会議が開かれて、大岩生徒総代が新体制について何か一席ぶったのでしょうか。それを数日後に、文一丙に報告することをさせられている。考えてみたら大変な時代だったですね。

まあとにかく、そのクラス総代だの幹事だのということで、本当に苦労しました。第一言葉が分からないですから。大園はあの大きな声で暴れ回っていて、お茶目をしたり、い

たずらばかりをしていて、実務面では殆ど役に立たないのです。だから、クラスコンパなどのとき、百万遍のかぎ屋、三条の三島亭というすき焼屋、二条のかぎ屋といった店に、全部僕が交渉に行きました。伊吹先生をお招きしてクラス会をやったり、その他いろいろのこともやりました。とにかく一年生の間、勉強よりも総代をどうやって無事に勤めていくかということで、先程も述べましたように、神経衰弱になるくらい心を痛めたことが、この日記にこまごまと書いてあります。

それから、非常に懐かしく思い出される授業が三つあります。最初の一つは、たまたま十一月の南座で歌舞伎の顔見世をやっているときでした。それを伊吹先生が、フランス語の授業をまるまる一時間つぶして、みんなに話して下さった。歌舞伎とはどういうものか、今南座で東西大歌舞伎顔見世興行をやっているが、どういう出し物があって、どういう役者が出ているかということを詳しく説明されて、それを一生懸命聞いたことを覚えています。

もちろん見に行きました。それが歌舞伎を見に行った最初です。日記にその時の出し物までちゃんと書いてあります。猿之助、後の猿翁、今の猿之助のお祖父さんです。それから沢村宗十郎、恐らく今の宗十郎さんのお祖父さんになるのでしょうか。そんな役者の名前を細かく書き込んでいます。伊吹先生のフランス語の授業をつぶしての歌舞伎の解説の

お陰で歌舞伎が好きになった、それが今日まで続いているのです。だから三高はいい学校だったとしみじみ思います。東洋英和女学院大学の国際関係論の先生をしていたとき、伊吹先生を思いだして、学生達に歌舞伎の話をしたことがあります。一つの忘れがたい授業でした。

次の一つは、伊吹さんだったか鈴木成高先生だったか覚えていないのですけれども、やっぱり授業をまるまるつぶし、その一時間をかけて、川端康成と横光利一の紹介を先生がして下さった。それがきっかけで僕は横光利一の「上海」だとか「機械」だとかを一生懸命読んだことを覚えています。

更にもう一つ思い出される授業は、阪倉篤太郎先生の国文法、昔はわ行が「わ、うい、う、うえ、うお」、それからた行が「た、てい、とう、てえ、と」だったということを、阪倉先生が黒板に五十音図を書いて説明された。その印象が鮮やかに残っています。論理的な説明で、なるほどと思ったのです。「わうい、ううえうお」という発音が昔はあったのだということの説明されて、時代とともに変化して来た日本語に、非常に興味を持ったことを覚えています。阪倉先生は僕の保証教授でした。

難しい日本語

いろいろおかしい話ばかりですけれども、「代返」という言葉が大体何を意味しているのかわかっていたのに、だ、い、と言う字はどんな字を書くのだろうと考えたことに、今は苦笑します。

それから、文一丙のクラスメイトの石上君と二人で、東山通りを丸太町の方へ歩いて行く途中で、石上君が「てんちゃん」、「てんちゃん」と言い出したのです。てんちゃんと言う言葉は見当も付きません。「てんちゃんて何」と聞いたのです。「天皇やないか」と石上君が教えてくれた。天皇陛下のことをてんちゃんと言う。日本語って面白い言葉だなと思いました。

それから、「なかす」という言葉、大体わかるのだけれども、どういう気持ちでみんなはそれを言うのだろう、なかすとはどういうことなのか、これは随分考えた。それから、藤田先生、「よたはる」、「よた」が分からないのです。大体見当は付くだけでも、よたはるってどうしてみんなよたはると言うのだろう、そんなことまで何かとにひっかかるわけです。

それからこれは話が変わりますが、僕の従兄に大川弘というのがいました。僕よ

り一年前に入って一年ドツペツて、僕が文一丙に入ったときに、彼は理一乙をもう一回やっています。この大川弘のうちに僕は下宿していたのです。というのは体が弱くて、医者伯父が、美雄は寮には入ってはいかん、うちにおれというわけです。それで、伯父のうちに二年半厄介になり、大川弘という理乙の従兄と一緒に通学しました。

その大川弘が随分いろいろなことを教えてくれた。日本の今の映画界に五人の優れた俳優がいる。一人は大河内伝次郎、一人は阪東妻三郎、一人は嵐寛寿郎、一人は片岡千恵蔵、一人は林長二郎、この五人だと、この五人男がすごいのだということを感じて聞かされた。それで、日本で一番の名優はこの五人かなと思つたものです。その一人、林長二郎が主演する「怒濤の岸」という映画が、四条大橋の脇にある映画館でやっていました。私は伯母に連れられてそれを見に行きましたが、これがちゃんばら映画を見た最初の経験です。やくざの格好をした林長二郎が櫓漕ぎの船にきれいな女の人を乗せて海へ漕ぎ出します。やくざの格好をした林長二郎が櫓漕ぎの船にきれいな女の人を乗せて海へ漕ぎ出します。何やら逃げて行くらしく一生懸命櫓を漕いでいたが、途中で女の人をおっぽり出し、なんかむにやむにや言つてどぶんと海の中へ飛び込んでそれでおしまい。一体どういふ話の筋なのか全く分からない変な映画で、何とも不思議に思つたことを覚えています。

私は来日子女であつたばかりに、子供の時分から今日までにいろんな言葉の失敗を経験しました。ここでその二・三をご紹介します。

これは日本に帰って来て一年か二年経った、まだ中学に入る前、芦屋に住んでいるときのことです。父の会社の重役の横部さんというおじさんが時々うちへ来られるのですけれども、ある日玄関に飛び出して行ったら、その横部さんが奥さんを連れて玄関に立っておられた。僕はびっくりして、「マミー（ママのこと）横部さんが女連れて来た」と叫んで、えらく叱られたことを覚えています。

それから、これもごく最近のことですけれど、「瓢箪から駒が出る」という話、僕はごく最近まで「こま」というのは、子供が回して遊ぶあの「独楽」だと思っていた。ところがそうではなかった。ワイフに笑われてごく最近覚えた。馬です。そういう慣用語で分からないのが今でも沢山あります。

それからこれは僕の話ではなくて、娘の話ですが、彼女はパリ生まれでイギリスで長い間学校へ行き、それからワシントンに行き、ボストンに行って大学を出ました。この娘が小学生の頃に日本に帰って来て、おばあちゃんのところへ行つて、二・三日過ごしていたときのことです。その家に鳥が飼つてあつて、こちらの鳥が雄おすでこちらの鳥が雌めすだと、おばあちゃんが教えてやったらいいのです。つまり雄と雌、maleとfemale。彼女は学校へ行ったら、お手洗ひへ行きたくなつてお手洗ひへ行つたのです。すると、どの手洗いのドアにも「おす」と書いてある。おすというのはpushということなのにそれを知らなかつ

た。これは男の人が入る手洗いだから、これは入ってはいけなないと、一生懸命「めす」のドアを探したという話、これは実話です。

それからお習字、僕は小学校の頃父親に無理に習いに行かされたのです。筆で字を書くのが本当に苦勞です。だいたい筆を使うと変な字になってしまいます。

外務省で在外公館へ館長で赴任するときは、慣例として宮家や皇居に記帳に行くことになっていきます。出かけるときも帰って来たときも、ご挨拶に記帳に夫婦そろって行くわけです。最初に館長になって行ったときは軍縮代表部特命全權大使、「軍縮」という漢字を小さな場所に筆で書かねばならない。軍という字は何とか書けても、縮という字は書くに四角が塗りつぶしたように真つ黒になってしまう。全然読めないくらいになってしまつて、これはえらいことになったと思つて大恥をかけたことがあります。筆を使うのが今でも苦手中の苦手です。許されるときはいつもペンか、あるいは普通のボールペン、鉛筆で署名することにさせて頂いています。

つまらない話をご静聴有難うございました。

(元在カナダ大使)